

一橋大学附属図書館の再生に向けて ―ビジョンと課題―

鈴木 宏子

一橋大学学術・図書部長兼学術情報課長

1. はじめに

来る2020年は、国立キャンパスに図書館時計台棟が建って90年となる。この間、一橋大学附属図書館中央図書館（以下、図書館）は、一橋大学の研究教育に貢献するため、資料の収集および提供に努めてきた。そして、資料の形態や流通方法等は著しく変化し情報が氾濫する現代においては、大学図書館に求められる機能も変化し、電子ジャーナルの提供やアクセス管理、機関リポジトリによる研究成果発信、さらにより積極的な学生への情報リテラシー向上支援など、図書館はそのサービスの範囲を拡げてきた。

一方、旧来の通り収集された資料はすでに図書館の容量に迫り深刻かつ喫緊の課題となっており、併せて予算、スペース等のいくつかの問題も顕在化している。これらの課題を見据えつつ、今後も刻々と変化を続けるであろう時代のニーズを汲み取り、常に図書館は自らの機能・役割を考える必要がある。そこで、本学におけるこれからの図書館の方向性を示すビジョンを明確にし、今取り組むべき課題とその解決策について、関係者間で共通認識を持つことが極めて重要と考える。

このような変化への対応は本学だけの現象ではなく、本学図書館が参加する国立大学図書館協会では2016年に大学図書館の役割を再認識するために「国立大学図書館協会館ビジョン2020：国立大学図書館機能の強化と革新に向けて」¹⁾を発信し、新たな役割、機能強化と革新に向けて次のような提言を行った。

“ 大学図書館の基本理念

大学図書館は、今日の社会における知識基盤として、記録媒体の如何を問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能にし、それらを活用し、新たな知識、情報、データの生産を促す環境を提供することによって、大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。”

本学においても、これからの図書館のビジョンを明確にし、方向性を一つにして課題に向かい、新たな役割に向けて機能強化を行う必要があると考える。

2. これからの図書館のビジョン

図書館が描くビジョンについては、一橋大学の研究教育憲章、研究教育の理念に基づき、以下のように案を提示したい。

■一橋大学附属図書館ビジョン

<ビジョン1. 図書館の目的・使命・存在意義>

一橋大学の掲げる目標に沿って社会科学の世界最高水準の研究教育を支える。

<ビジョン2. これからの図書館のあるべき姿>

- (1) 充実した学術研究基盤の確立
- (2) 創造および収集された知的・文化的資産の蓄積と公開
- (3) 豊かな教養と公共性を備えた専門人の育成支援
- (4) あるべき姿を支える人材の育成

<ビジョン3. これからの図書館のアクションプラン>

- (1) 充実した学術研究基盤の確立
 - ・国際研究力強化に寄与する研究成果の公開発信促進
 - ・世界水準の電子ジャーナル等による研究環境
 - ・ニーズに応じた迅速な情報提供による研究支援
 - ・イノベーションとコミュニティ活性化のための研究空間創出
- (2) 創造および収集された知的・文化的資産の蓄積と公開
 - ・社会科学の発展に寄与する知的・文化的資産の保存・蓄積
 - ・知的・文化的資産の社会への発信・公開
- (3) 豊かな教養と公共性を備えた専門人の育成支援
 - ・学生に必要な情報リテラシースキル構築支援

- ・学修時間・読書時間の拡充に寄与する利用環境
- ・多様な学習スタイルに対応した学修空間の創出
- ・グローバル社会に対応した学修環境

(4) あるべき姿を支える人材育成

- ・学術情報の発信・流通に精通した人材の育成
- ・学修支援に精通した人材の育成
- ・文化的資産の保存に精通した人材の育成
- ・学内外の多様な人材および関連機関との連携

上記のように時代の変化に対応するため、今求められるビジョンを掲げることは大切ではあるが、一方、過去の歩みを認識することも必要である。そこで次に、図書館の歴史を振り返ってみたい。

3. 一橋大学附属図書館の歴史

1) 創立から2000年まで

図書館は、本学創立以来、社会科学の豊富な資料を中央図書館制度の元に集中的に収集し、本学の研究を支えてきた長い歴史を持つ。この間を振り返れば、社会科学の世界的名著やコレクション（メンガー文庫等）を積極的に収集し、第2書庫、第3書庫を増築し、1970年代にはフランクリン文庫の入手を機に西洋古典資料のみを収容する社会科学古典資料センターを設立している。1990年代には、現在の雑誌棟を建設し2000年に現在の図書館本館が竣工している。このようにこれまでの図書館は、社会科学の総合大学にふさわしい資料の収集とそのためのスペースの増強に力を注いできた。

2) 図書館の増改築第1期、第2期計画

図書館の増改築の経緯については、小野の論文（2015）²⁾に詳細が報告されている。これによれば、1996年に竣工した新図書館（現:雑誌棟）までを附属図書館増改築第1期計画と呼び、2000年に竣工した図書館本館までを第2期計画と呼ぶ。

図書館では、1980年代以前からすでに慢性的なスペース不足（書架狭隘問題）を抱えており、増築や電動集密書架の設置を行ってきた。昭和54（1979）年に設置された「一橋大学

長期構想委員会」の審議事項の中に、図書館の長期計画に関する事項が盛り込まれている。

「一橋大学長期構想委員会」第5回委員会に（昭和60（1985）年4月17日）に川井健附属図書館長から「図書館の長期構想の問題点について」という資料が提出され、審議の結果「図書館問題の具体的作業については・・・小委員会を設け検討を進める」こととなった。この後、小委員会からの報告に基づき、昭和61（1986）年9月26日付で一橋大学長期構想委員会により「図書館問題に関する答申」が提出されている。

この答申では「長期構想をおおよそ20年後を見通しての構想」としており、要点として、①図書館は総計200万冊を収容する。②学習図書館機能、③研究図書館機能、④保存図書館機能（小平地区）を持つことを挙げていた。これを基礎に第1期、第2期のそれぞれの増改築計画がなされ、本館が竣工した平成12（2000）年に一定の成果を得ることとなる。

3) 2001年以降の変化

21世紀になると、図書館の目指すところは電子化の方向に向かう。2001年の一橋大学デジタルアーカイブ（HDAのちにHERMES-IRに統合）の構築に始まり、2007年には一橋大学機関リポジトリ（HERMES-IR）による本学研究成果のオープンアクセスによる発信を開始。また電子ジャーナル等の電子資料の整備・提供が重要な課題となり、2013年には、冊子の購読を中止し電子ジャーナル契約に切り替えるなど、電子化と電子的サービスが本格的となった。さらに、このような環境の変化に伴い、当然研究や学修のスタイルも変化してきている。2012年には「時計台棟コモンズ」を開室した。これは、この頃、多くの大学図書館が改修工事等に合わせて設置した学生のためのラーニング・コモンズ³⁾の一つの形である。また、2016年には念願であった小平収蔵庫の改修が完了し小平研究保存図書館を設置した。これにより、構想されていた保存図書館機能が揃うこととなる。

4) 図書館の強み（コア・コンピタンス）

本学図書館の強みについて言及した、豊田、高橋（2007）の論文⁴⁾があり、よく説明されているので以下に紹介したい。

この論文では、1)蔵書冊数、2)受入図書冊数、3)貸出冊数、4)図書館費の4つの項目に沿って図書館のコア・コンピタンス（中核となる強み）を分析している。1)蔵書については、3つの特徴を挙げており、①社会科学系に特化した特徴を持つこと、②中央図書館制度をとり研究資料はすべて図書館に集中配架すること、③全蔵書の10%を占める60以

上のコレクションを持つことを挙げている。2) 受入については、①複本を購入しない方針により保存に対する意識が高いこと、②寄贈を積極的に受け入れてきたことが挙げられる。3) 貸出については、①中央図書館制度と共に開架100万冊が手に取れること、②ニーズを呼び起こす展示等の工夫をしていること。4) 図書館費については、全学経費の20%以上とされた専門図書館費、および各研究科に配分された研究科等経費の60%以上を学術資料整備費に振り替えるという全学共通経費化というべき予算配分方式を取っていることを挙げている。このように、常に「大学ランキング」⁵⁾の上位を保ってきた本学図書館の強みが紹介されている。

また、長く本学学生を支えた図書館であるからこそ、多くの卒業生のファンを持ち続けていることも強みの一つと考えられる。豊富な資料があることだけでなく、クラシックで格調高い時計台棟や大閲覧室の佇まいが学生時代の思い出と共に卒業生の心に刻まれていることも推測される。その思いは定量的には測りがたいが、一橋大学創立100周年の際に、「創立百年記念事業募金会」から、図書購入資金として8億円が寄付されたことも⁶⁾、その証左であると言えよう。

4. 現状と課題

2007年時点でコア・コンピタンス（強み）として挙げられていた、1) 蔵書冊数、2) 受入図書冊数、3) 貸出冊数、4) 図書館費の4つの項目のうち、3) 貸出冊数を除く3件が、現状の課題に繋がっていることは、残念ながら事実ではある。

それを見ていく前に、3. 2) に挙げた小野論文によれば、事務職員による「図書館サービスワーキンググループ」のまとめた平成12(2000)年3月24日付の「まとめと課題」が<資料2>として提示されているので、以下に引用したい。

“ 7. 第Ⅲ期計画

- ・新図書館完成後、資料の大幅な移動や補助書架の設置なしに資料が収容可能なのは計算上約10年となっている。それまでに、小平図書収蔵庫の跡地利用も含め第Ⅲ期計画に向けて、長期的な収用計画を立案する必要がある。 ”

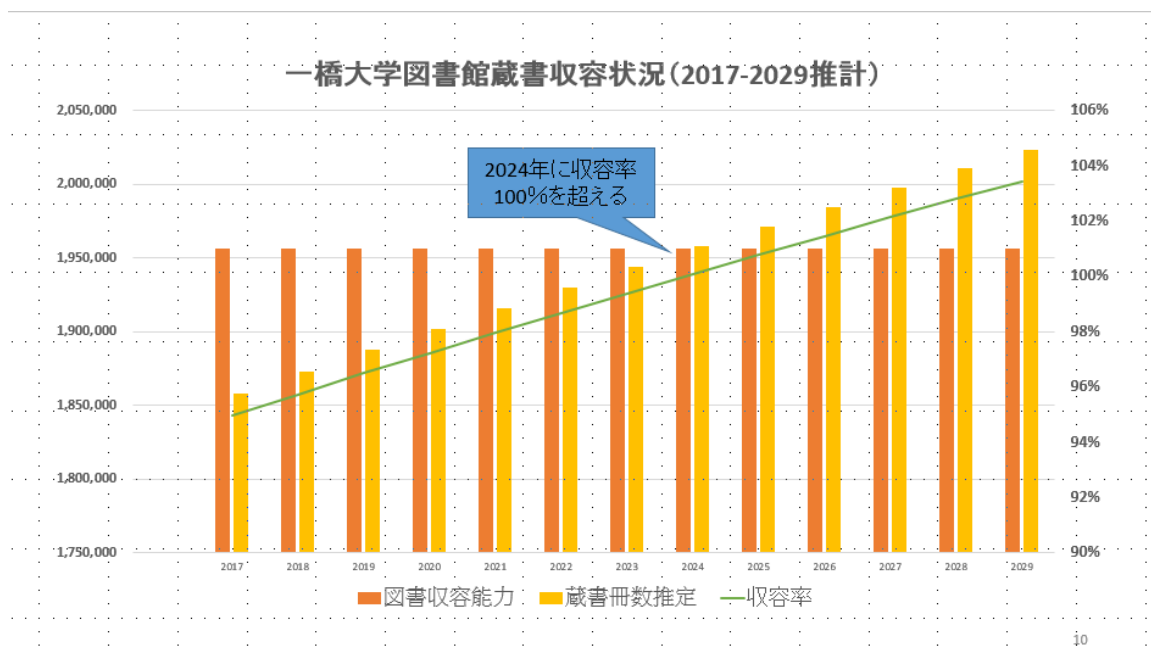
このように、2000年当時より収容可能年限を10年と見積もっていたことが判る。それから、16年経った2016年に小平研究保存図書館が完成したが、1-2年の内に国立から移動し

た雑誌で予定された書架は満杯となり保存図書館としての機能が終了したことを記して、現状での最も大きな課題である書架狭隘化から見ていくこととする。

1) 書架狭隘化

<現状>

中央図書館全体の資料収容率は、すでに95%を超え、このままでは2024年には、100%を超えることが予想される。他の国立大学で学部等に蔵書を置く場合があり、収容率がそのままメインの図書館の収容率とはならない場合があるが、古くから中央図書館制度を取ってきた本学では、この数字はそのまま中央図書館の狭隘化を意味する。



(図1)

<原因と対策>

この原因の一つとしては、保存図書館として期待された小平研究保存図書館がすぐに余裕がなくなったこともあるだろう。また、本館の開架化の際に、旧分類と新分類(コード分類)を共存させて開架に残したことも一因とも考えられる。通常、書庫は開架に収まり切れなくなった資料を収容するところであり、開架は、古いものを書庫へ収容して新しいものを受け入れるスペースである。しかし、中央図書館本館の開架スペースに在っては、さらに古い資料である旧分類資料が固定化して

しまい、増え続けるコード分類資料のため、旧分類、コード分類の双方を、少しずつ移動してスペースを作るという対策しか取れなくなった。

この問題を解決するには、全体の資料配置を見直し新たな受け入れに対処できるスペースを確保する必要がある。とはいえ、従来のようにスペース増強策を取るとは、資料の電子化が進展する時代にあって得策ではない。では、適切な資料配置を考える上で大切なことは何かというと、第一に本学に残す資料は何かという大きな問題について議論が必要となるだろう。本学に残す資料は何かを考える場合、電子ジャーナル、Google Booksなどの電子化公開の進展等を鑑み、入手可能な資料は物理的に残さない、また今後の資料購入においても電子版とする、などの原則が合意され、それに従って施設整備、資料再配置の計画を立てることが必要となるだろう。

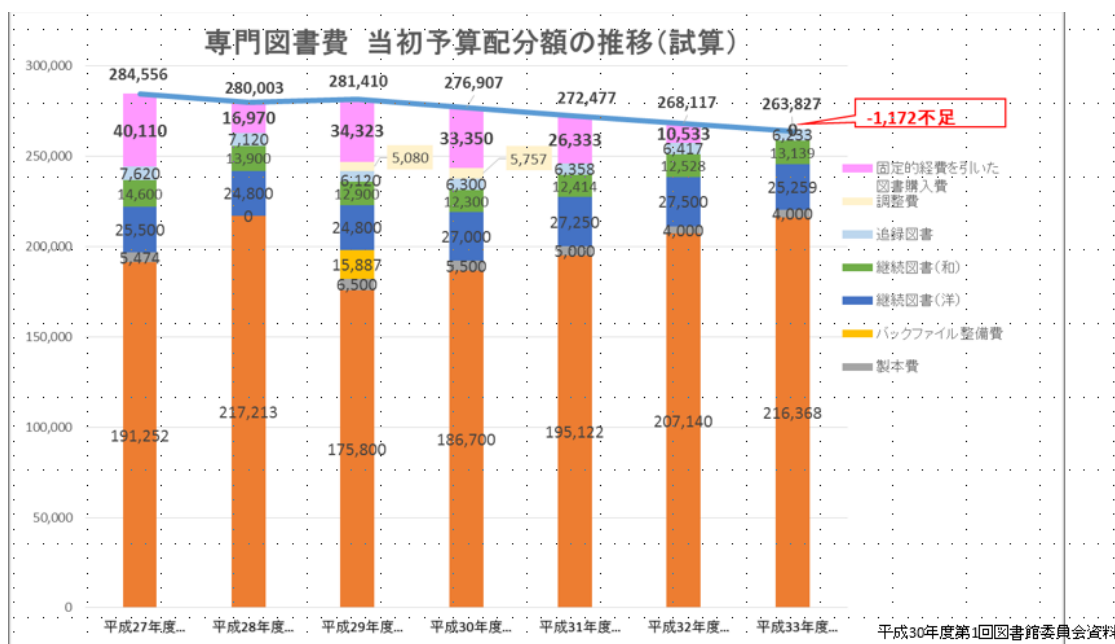
2) 図書予算

<現状>

本学では図書予算は、専門図書費として学内配分され、図書、雑誌等の項目別に再配分した予算案を図書館委員会にて承認する形で運用している。専門図書費は長く同額を保ってきたが、2016年度より機能強化促進係数1.6%減が毎年課されており配分額が目減りしている。加えて、同じ2016年の10月から海外コンテンツへの消費税課税8%（2019年10月からは10%）、および電子ジャーナル等の原価高騰（全分野平均4.1%上昇）あわせて、為替の変動という流動要因があり全体的に大きく減少している。その結果、主にしわ寄せを受けるのは図書費であり、学生用図書等に大きく影響を与えている。

<原因と対策>

社会科学の総合大学として研究資源である図書資料の予算が潤沢であったことは本学図書館のコア・コンピタンスのひとつであった。しかし、聖域として守られていたために返って対策が遅れたとも考えられる。多くの（特に理系のある）大学では、電子ジャーナル登場時に通常の図書資料費では対応できず、電子ジャーナルのみ図書資料費から切り離して共通経費化する等の対策が取られてきたが、本学ではその検討はなされなかった。また、学術資料費の名目で洋書費として各研究科



(図2)

に配分されてきた学術資料整備費は、研究科内でその配分を協議し 60%以上を図書館に移換するという運用を行ってきた。当初より洋書費とされてきた学術資料整備費も現状では電子ジャーナルに流用されることが多く、専門図書費、学術資料整備費を合わせて、電子資料の時代に最適な予算の運用方法を検討することが重要である。

3) 寄贈図書の滞貨

<現状>

豊富な文庫、コレクション等を所蔵することも本学のコアコンピタンス(中核的強み)の一つと考えられてきたが、寄贈図書の整理の滞貨が現状では大きな問題となっている。図1に示した収容率算出の根拠となっているのは、すでに資産として登録されている資料のみとなる。現在、寄贈予定として持ち込まれたままとなっている受入(登録)前の資料が、数多く滞貨されている。正確な数量は不明であり、かつ非図書資料(研究者手稿、ノート、書簡等)も数多くある。一度滞貨してしまうとなかなか整理が追い付かず、現状の人員では対処しきれないところまで来ている。

<原因と対策>

今までほぼ無条件に寄贈図書を受け入れてきたこと、また本学元教員等の関係

者からの寄贈の場合、受入決定以前に書庫に仮置きされていたことなどが、現状の混乱を生んでいると考えられる。寄贈受入方針を大きく転換し、通常の寄贈は受け入れない、本学関係資料や社会科学の発展に寄与する資料等に限って受け入れるなどの水際での対策が考えられる。また、すでに受入予定の資料に関しては、計画的に進め、外部資金の獲得や人員の確保などの対応が必要である。

4) スペース有効活用の遅れ

<現状>

2010年代以降、多くの他大学で設置するようになったラーニング・コモンズについては、本学では2012年に時計台棟コモンズを開室した。しかし、時計台棟のセミナー室を改修したものであって、グループ討議が必要とされる授業、ゼミにとっては十分かどうかの検証が行われていない。本館と雑誌棟に合わせて5室のグループ学習室があるが、時計台棟コモンズもグループ学習室も試験期前などには満杯となっている。また、ラーニング・コモンズの効果としては、仕切られた中でディスカッションだけではなく、見る・見られるのオープンな場を用意することによって、お互いが刺激され触発されるという学修・研究への効果が期待できることも言われている。

<原因と対策>

今まで見てきたように、本学図書館は中央図書館制度の下に資料を収集する場であった。そのため、従来のスペース増強はすべて資料のためのものであった。しかし、電子資料が普及する現在においてスペースは資料のためだけのものでは、有効に活用されているとは言えない。必要な資料を取捨選択し、最適な資料配置を計画し、有効なスペースを創出して学修・研究の促進に貢献することが図書館として必要なことと思われる。

5. 課題の対策としての保存と収集の原則

今までに述べてきたように、今後の図書館は明確なビジョンを掲げて、その実現をゴールとして努力していくことが求められる一方、そのビジョンの実現を阻む現状の課題にいかに対処していくかが必要なこととなる。そこで何に最初に着手すべきかということを考えると、資料の入り口と出口の問題となろう。

すでにインターネット上には、有料（契約型電子ジャーナル、電子ブック等）、無料（オープンアクセス論文、デジタルアーカイブ、国立国会図書館デジタル化資料、Google Books等）の多種多様な電子資料が存在している。この現状に即した課題の解決策として、今後の収集方針は電子版を原則とすることにシフトすることとしたい。また、寄贈受入についても本学に関連しかつ社会科学の発展に寄与するものについてのみ受入することとし、その他の寄贈については原則受入をしない。また、既存の所蔵資料の保存については、電子版等の代替資料の利用が可能なものは処分する、学内に重複資料を持たない。一方、本学が所蔵する知的・文化的資産である資料については利用可能な形で保存することとする。以上を基本コンセプトとして以下のような原則を提案する。

■保存収集に関する原則（案）

1) 収集方針

- ・今後収集する資料は、電子版を原則とする。
- ・電子版の有無や利便性等を勘案し有益と判断されたものについてのみ紙資料を収集する。

2) 寄贈資料受入基準

- ・本学の歴史上必要とされる資料、および社会科学の発展に寄与する資料のみ受け入れする。
- ・上記に該当しない寄贈資料については原則受け入れをしない。

3) 保存方針

- ・既存の紙資料については電子版等代替資料が利用可能なものは原則として処分する。
- ・本学が所蔵する知的・文化的資産である貴重書等については利用可能な形で保存する。

なお、個々の方針の詳細については、今後別に定めることが必要であろう。

また、上記原則の元に、ビジョンが示す目標に向かって以下のように業務を進めたい。

- 1) 保存収集に関する原則に従って既存資料の見直しを図る。
- 2) 保存収集に関する原則に沿った予算枠を検討する。

合わせて外部資金の調達計画を策定・実行する。

3) 資料再配置、スペースの有効活用計画を策定する。

保存収集に関する原則に従って適切な資料再配置を計画し、再配置によって生じるスペースの有効活用を計画する。これらの計画の元に、老朽化した第2、第3書庫の改修も視野に入れた施設整備の概算要求を計画する。

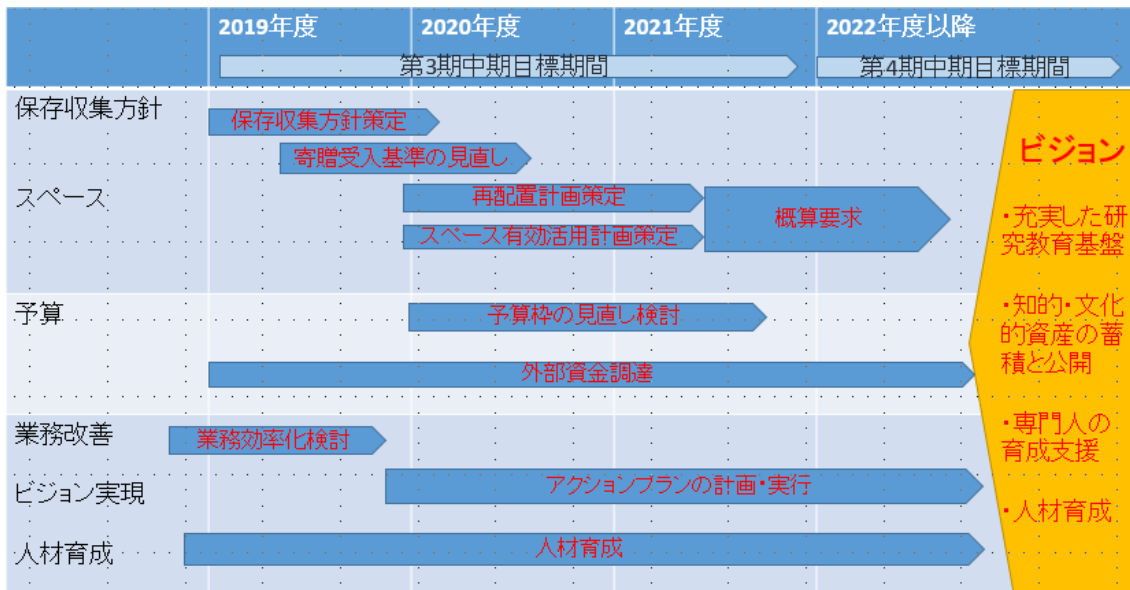
4) 業務改善、人材育成

保存収集に関する原則に従って業務の流れを見直し、効率化・改善を図る。

ビジョンの実現のための人材育成を図り、学内外の多様な人材および関連機関と連携する。

6. ゴールへのロードマップ

第3期中期目標期間（～2021年度）から第4期中期目標期間（2022年度～）を通して、保存収集方針に沿って、資料の整備、再配置および予算枠の検討を行い、あわせてスペースの有効活用のための計画を策定する。また並行して大学の研究と教育に積極的に貢献する。



(図3)

7. 終わりに

これからの図書館のビジョンを掲げるとともに、図書館の歴史、現状の課題を見てきたが、今までも繰り返されたように、革新的なイノベーションの登場により現在の価値観や拠り

所が逆転するようなことが、1年後にも起こり得る時代である。今示したビジョンも時代にそぐわない日がやってくることも考えられる。であるからして、今後も刻々と変化を続けるであろう時代のニーズを汲み取り、常に図書館は自らの機能・役割を考え続ける必要がある。一方、本学図書館にとっての変わらない強みは、先にも挙げた通り、卒業生に愛される格調ある雰囲気やブランド力である。それを大事にしつつこれからの図書館を考えていくことも忘れてはならない。ランガナタンの五原則⁶⁾にある「図書館は成長し続ける有機体である」とは、自らの役割を問い続けることにあるのだと思う。

参考文献・注

1) 国立大学図書館協会. 国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2020～. 平成28年6月17日.

<https://www.janul.jp/ja/organization/vision2020> (accessed 2019.2.26)

2) 小野 亘. 一橋大学附属図書館増改築第1期・第2期計画について. 一橋大学附属図書館研究開発室年報. 2015, 3号, p. 90-120.

<http://doi.org/10.15057/27553> (accessed 2019.2.26)

3) ラーニング・コモンズ

“学生の学習支援を意図して大学図書館に設けられた場所や施設. 具体的には、情報通信環境が整い、自習やグループ学習用の家具や設備が用意され、相談係がいる開放的な学習空間をいう。飲食コーナーが付設されていたり、図書館外に設置される例もある。1990年代に米国で増加し、日本では2000年代後半に導入が始まった。運営については、図書館資料やデータベースの利用と図書館員の常駐は必須とする考え方から、学生が快適に学習する環境があればよいとする考え方まで多様である。「インフォメーションコモンズ」「ラーニングセンター」など名称も一定ではない。図書館という物理的な空間が持つ力を評価する「場としての図書館」の議論が高まる中で、大学図書館を中心にラーニング・コモンズにかかわる多様な試みが見られる。” (出典：図書館情報学用語辞典 第4版 (Japan Knowledge))

(accessed 2019.2.26)

4) 豊田 裕昭, 高橋 菜奈子. 一橋大学附属図書館の蔵書管理とその利用 : 大学図書館ランキングにみるコア・コンピタンス. 大学図書館研究. 2007, vol.80, p. 1-10.

<http://hdl.handle.net/10086/16458> (accessed 2019.2.26)

5) 「大学ランキング」朝日新聞出版

1994年より毎年刊行される日本の大学を多面的に評価する総合誌。教育環境、研究能力、就職支援、卒業生の活躍などの項目の中に、大学図書館ランキングがある。

6) “「創立百年記念事業募金会」から、図書購入資金として8億円が1979年から1980年の間5回に分けて寄付されることになった(「一橋大学百二十年史 p.234」)。”

附属図書館 Web サイト>図書館の歴史 1945-1999 1979年(昭和54)

<http://www.lib.hit-u.ac.jp/about/history/1945.html#a1980> (accessed 2019.2.26)

7) ランガナタンの図書館5原則

“ランガナタン Ranganathan, Shiyali Ramamrita

1892-1972. インドのマドラス州生まれ. インド図書館学の父とも分類理論の世界的権威とも称され, 現代の図書館学やドキュメンテーションに大きな影響を与えた人物の一人.

「図書館学の五法則」で知られる図書館学の根本原理の提唱など, 図書館学のほぼ全分野にわたって活動した.” (出典: 図書館情報学用語辞典 第4版 (Japan Knowledge))

(accessed 2019.2.26)

「ランガナタンの図書館5原則」

1. 本は利用するためのものである
2. 本はすべての人のためにある。または、すべての人に本が提供されなくてはならない
3. すべての本をその読者に
4. 読者の時間を節約せよ
5. 図書館は成長する有機体である

[Report]

Toward the revitalization of the Hitotsubashi University Library : visions and issues.

Suzuki, Hiroko.

Head & Manager, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,
Hitotsubashi University